富岡重憲コレクションおよび近年受贈の寺畑助之丞作品

下　野　玲　子

当館の富岡重憲コレクション（旧富岡美術館所蔵品、2004年当館受贈）には彫刻家寺畑助之丞（1892～1970）の作品が７点あり、さらに2015年度に重憲氏の御令孫、富岡総一郎氏から５点の追加寄贈を受けた[註1]。そこで合計12点となった寺畑作品について、簡単ではあるが画像とともに紹介することにしたい。今後、近代彫刻の研究資料として活用していただければ幸いである。

寺畑助之丞の略歴を先行研究に拠ってまとめると以下の通りである[註2]。

明治25年（1892）　富山県伏木町古国府（現高岡市）に生まれる。
大正２年（1913）　富山県立高岡工芸学校（現県立高岡工芸高等学校）卒業。東京美術学校予備科に入学。
大正７年（1918）　東京美術学校彫刻科本科塑造部を卒業。
大正９年（1920）　朝鮮総督府技師としてソウルに赴任し、総督府新庁舎一般建築彫刻を担当する。
大正11年（1922）～14年（1925）　第１回～４回朝鮮美術展に出品。
大正15年（1926）　東京に戻り、東京高等工芸学校工芸図案科工芸彫刻部助教授となる。
昭和３年（1928）　第２回構造社展に出品、構造賞受賞（翌年会友、翌々年会員）。以後出品を続ける。
昭和10年（1935）　構造社の分裂に際し彫刻部を脱退する。
昭和11年（1936）　新構造社の設立に参加し彫刻部と工芸部の代表を兼任。
昭和13年（1938）　東京高等工芸学校工芸図案科工芸彫刻部教授となる（戦後まもなく退任）。
昭和25年（1950）　自主連立展（新構造社ほか）に出品。没年まで出品を続ける。
昭和45年（1970）　東京都中野区の自宅で死去（享年77）。

構造社は大正15年（1926）に齋藤素巖と日名子実三が設立した彫刻団体で、のちに絵画部も設置され、年１回公募展が開催された。寺畑は第２回から第９回まで毎年多数の彫塑作品を発表したが、昭和10年（1935）に構造社が分裂した際に会員を辞任し、新構造社の設立に加わった。このほか戦時中に新文展、戦時特別展等にも出品し、海軍省嘱託として御下賜品の陶板制作もおこなった。戦後は新構造社と他団体との連立展に加え、日展に数回出品している。また日本彫塑家倶楽部理事、日本美術家連盟会長なども務めた。作品は彫塑（石膏、ブロンズ）が中心だが、絵画や陶磁器も制作している。

つづいて当館所蔵品の概要を紹介したい。冒頭の番号は本稿で制作年順に記述するため便宜上付けたもので、作品名（当館における）、制作年、材質、寸法（高×幅×奥行cm）、所蔵番号、銘文、箱書き、概要の順に記載する。

⑴　**路傍の人々（図１）**　　昭和３年（1928）　ブロンズ　83.5×121.0×9.8cm　富岡総一郎氏寄贈 2015-2

表面左下部に刻銘「1928. S. Terahata」がある。第２回構造社展出品作[註3]。矩形のレリーフで、朝鮮の民族衣

裳をまとう男女の群像表現。原型石膏像を松戸市が所蔵している[註4]。当館で2016年９月に木製の枠と台を新造し、２階壁面に固定した。

⑵ **母子像Ⅰ（図２）**　昭和6年（1931）　石膏着彩　134.0×69.0×48.0cm　富岡重憲コレクション彫 F-12

台座上面左後方に刻銘「助之丞作」がある。第５回構造社展出品作。出品題名は「母と子」。左手に葡萄の実を掲げて立つ母と、母の右側に立ちその顔を見上げて両手を伸ばす男児を象った、大型の作品である。

⑶ **聖徳太子像（頭部）（図３）**　昭和８年（1933）　ブロンズ　51.0×48.0×37.0cm　富岡重憲コレクション彫 F-5

頸部背面に刻銘「昭和八年　助之丞作」がある。第７回構造社展出品作。郷里富山県伏木町の勝興寺住職の依頼を受け、一万人の納骨を漆に混ぜて乾漆の聖徳太子像を制作することになり、本像はその頭部である。翌昭和９年に全身の石膏原型、昭和10年に乾漆像が完成し、４月に勝興寺で開眼式が営まれた。美豆良を結い袈裟を着けて柄香炉を持つ聖徳太子像は孝養像とよばれ、鎌倉時代以降の彫刻作品が多数残っている。寺畑はこの時まで仏像制作の経験がなかったが、奈良・京都を回って古典彫刻の研究を重ねた上で制作したという[註5]。原型石膏像は松戸市が所蔵している。

⑷ **母子像Ⅱ（図４）**　昭和28年（1953）　ブロンズ　86.0×41.0×34.0cm　富岡重憲コレクション彫 F-6

台座左横に刻銘「昭和二十八年／助之丞作」、台座内側に陽刻銘「堺幸山鋳」とある。母は右掌を前に出し、左手を子の肩にのせて立つ。子は母の左後ろにすがり、左足を踏み出す姿勢で立っている[註6]。

⑸ **呼びかける母（図５）**　昭和35年（1960）　ブロンズ　母：14.6×40.1×20.0cm、子：9.7×22.2×12.0cm　富岡重憲コレクション彫 F-8

母像の底面に自書銘「助之丞」、子像の底面に刻銘「助之丞」がある。箱の蓋表に墨書「呼びかける母」、蓋裏に墨書「昭和三十五年／助之丞／〔助之丞作〕（朱文方印）」がある。第12回連立展（新構造社・女流朱葉会・創造美術）新構造社出品作。母と子が仰向けになり上半身を起こして背中合わせになった姿勢の像。

⑹ **横臥する女（図６）**　昭和36年（1961）　石膏着彩　16.2×25.1cm　富岡総一郎氏寄贈 2015-5

額裏に墨書「横臥する女／昭和三十六年／助之丞作〔助之丞〕（朱文方印）」がある。この年開催された第13回（新構造社・朱葉会）新構造社に同名作品が出品されており、本像の可能性がある。頭を左に横たわる裸婦のレリーフ小品。

⑺ **子供と馬（図７）**　昭和37年（1962）　ブロンズ　47.8×43.5×14.2cm　富岡重憲コレクション彫 F-7

台座上面後方に刻銘「昭和三十七／年／助之丞」がある。箱の蓋表に「子供と馬」、蓋裏に「昭和三十七年／助之丞作／〔寺畑信印〕（白文方印）〔助之丞作〕（朱文方印）」の墨書がある。第14回連立展（新構造社・朱葉会）新構造社出品作。裸馬の頸につかまり背に跨がる小児の像。

⑻ **母子像Ⅲ（図８）**　昭和41年（1966）　ブロンズ　65.3×20.0×38.0cm　富岡重憲コレクション彫 F-9

台座右後方に刻銘「昭和四十一年／助之丞作」がある。前傾姿勢で左足を前に踏み出し、子供を抱く女性の像。

⑼ **母と子（座る）（図９）**　昭和43年（1968）　ブロンズ　31.4×25.8×42.7㎝　富岡総一郎氏寄贈 2015-3

箱の蓋表に「青銅／母と子」、蓋裏に「助之丞／〔寺畑信印〕（白文方印）〔助之丞作〕（朱文方印）」の墨書がある。この年の新構造社・朱葉会展の特別出品作。母は左膝を立てて上体を後ろにそらして座り、背に子がすがりつ

図１　路傍の人々

図３　聖徳太子像（頭部）

図２　母子像Ⅰ

図４　母子像Ⅱ

図５　呼びかける母

図６　横臥する女

図８　母子像Ⅲ

図７　子供と馬

図９　母と子（座る）

く形。本像の石膏像は松戸市が所蔵している。

⑽ **仲よし（図10）**　制作年不詳　ブロンズ　27.6×13.1×11.1㎝　富岡重憲コレクション彫 F-10

台座上面右側に刻銘「助之丞作」がある。箱の蓋表に「青銅／仲よし」、蓋裏に「助之丞作〔助之丞〕（朱文方印）」の墨書がある。女性二人が互いの肩を抱いて横並びに立つ像。高岡市美術館所蔵「話し合う女像」（昭和25年〈1950〉作、28.0×14.0×11.0㎝）に酷似し、同型作品の可能性が高いと考えられる（註7）。

⑾ **大黒天像（図11）**　制作年不詳（昭和28年以後）　25.5×18.7×20.2㎝　富岡総一郎氏寄贈 2015-4

箱の蓋表に「青銅／福禄大黒天」、蓋裏に「福禄大黒天尊勧進文／（長文のため中略）／福禄大黒天謹写寺畑助之丞作〔助之丞〕（朱文方印）」の墨書がある。箱蓋裏書は箱に同封された印刷物「福禄大黒天尊勧進文」にもとづく像の由来である。それによれば本像は寺畑が神奈川県川崎市の青龍山龍厳寺が所蔵する伝教大師作と伝わる大黒天像を模して制作し、勧進のために頒布されたもの。制作年は明確でないが、勧進文に昭和27年・28年の出来事が記されているため、それより後であろう。甲をまとい、左手に剣、右手に袋を持ち、右足を踏み下げて円形の台座に坐す大黒天像である。

⑿ **裸婦（図12）**　制作年不詳　陶製　15.0×19.5×3.5㎝　富岡総一郎氏寄贈 2015-6

向かって左下に刻銘「S.T」とある。頭を向かって右にして横たわる裸婦の陶板レリーフで額装されている。胎土は白く、人物像は無釉、その周囲は白濁釉と青色の釉がかかっている。本作品名は原題不明のため仮に付けたものである。

図10　仲よし

図11　大黒天像

図12　裸婦

本稿をなすに当たり、作品寄贈者の富岡総一郎様、寺畑助之丞御令孫の山名泉様、松戸市生涯学習部社会教育課美術館準備室の田中典子様、旧富岡美術館学芸課長・本学元特任教授の浅井京子先生にご厚意を賜りました。また早稲田大学博士後期課程の龔楊飄飄氏には印章解読についてご協力いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

註

(1) 寺畑は富岡重憲氏の長男唯一氏の昌子夫人にとって父方の伯父に当たり、その縁で富岡家は多数の作品を所持していた。

(2) ①田中典子「寺畑助之丞とその作品」および「寺畑助之丞年譜」(松戸市教育委員会社会教育課美術館準備室編『「昭和初期彫刻の鬼才たち　寺畑助之丞と構造社」展パンフレット』(財)松戸市文化振興財団発行、2006年１月）２～25頁。そのほか以下の資料を参照した。

②松戸市デジタル美術館「寺畑助之丞」 https://www.city.matsudo.chiba.jp/miryoku/kankoumiryokubunka/rekisi-bunka/dezitarubizyutu_top/search/search_ta/ta004/index.html（閲覧日 2021-12-18）

③「寺畑助之丞」『日本美術年鑑』昭和 46 年版、101 頁。

④「寺畑助之丞　日本美術年鑑所載物故者記事」(東京文化財研究所）https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9306.html（閲覧日 2021-12-18）

⑤日外アソシエーツ株式会社編『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、2004年

(3) 展覧会出品情報は主として前掲註①による。その他、戦前の構造社・新構造社の展覧会目録は以下の文献で確認した。青木茂監修、東京文化財研究所編纂『近代日本アート・カタログ・コレクション088構造社・新構造社　昭和２年～18年』株式会社ゆまに書房、2008年。

(4) 前傾註２の①および②参照。以降の作品の石膏原型の所蔵についても同様。

(5) 「寺畑助之丞」(浜崎礼二・前村文博編『構造社展－昭和初期彫刻の鬼才たち』キュレイターズ発行、2005年、166頁）参照。

(6) 『日展史』によれば昭和28年の第９回日展第三科彫塑に「母と子」という作品が出品されているが、当館蔵品と同一の作品か確認できていない。『日展史』17（社団法人日展、1987年）448頁参照。

(7) 「話し合う女像」は高岡市美術館編集・発行『高岡市美術館所蔵品図録2011年度版』2013年、158頁に写真が掲載されている。

なお、本作と同じ「なかよし」という題名の作品が第９回構造社展（1935年９月１～19日、東京府美術館）に出品されているが、写真を未確認のため同一物か不明である。前掲註２の①および５（浜崎礼二・前村文博・迫内祐司編「構造社主要会員出品目録」および浜崎礼二編「構造社年譜」）参照。